北村透谷「漫罵」の射程・補
―中江兆民「三酔人経綸問答」考―

槙林滉二

はじめに

明治維新について、「その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より来りしにあらず。外部の刺激に動かされて来りしものなり、革命にあらず移動なり。」と嘲じた北村透谷の「漫罵」（明26・10）は、その後の日本近代化の動向に多くの予兆と予見を提示していた。日本近代、現代はその提示を越えたのか、超えたのか私はそのことについて「北村透谷『漫罵』の射程」として少し考を加えてきた(注1)。本考はその道程に一つの補考を添えるものである。

明治二十六年九月、透谷は「兆民居士安くにかある」という一文を記し、「ルソー、ボルテールの思想」などを「邦人」に伝え、「彼は思想界の一漁師として漁獲多からざるにあらず、社会は彼を以て一部の思想の代表者と指目せしに、何事ぞ、北海に遊商して遠く世外に超脱するは。」、「世、兆民居士を棄てたるか、兆民居士、世を棄てたるか、抑も亦た仏国思想は遂に其の根基を我邦土の上に打建つるに及ばざるか。」と、中江兆民の思想界から実業界への反転への疑義を提している。

そこに私は、一つの深い悲鳴と嘆息を聞く。「漫罵」を発表するのは、その一月のちであり、この時は透谷はまだ日本近代化志向の道程にあった。透谷が兆民の「三酔人経綸問答」（明20・5）を読んでいたかは明らかでない。しかし、右の兆民の思想界離脱を嘆じた時、私は少しく透谷と兆民の内的呼応、時代悲傷を見る思いがする。「漫罵」における透谷の嘲罵と「三酔人経綸問答」における兆民の苦渋との間に一つの呼応するところ

があるように思われるが故である。右透谷の言及は明治二十六年であり、兆民のそれは、明治二十年である。この明治中期の数年の間に、近代化を企てる日本の道程に、何らかの時代的断層が生じていたのではないか。兆民の敗れと透谷の悲嘲との間に、何らかの変相があるように思われる。

前記のように私は「『漫罵』の射程」として、日本の近代、現代化の道程について考を重ねてきた。時の流れからいうとこの兆民との対比は逆流的であり、「漫罵」の嘲罵の遡行的射程と言うべきものであろうか。このことはその内意について、後考したい。

そのために、まずは「三酔人経綸問答」の構図とその思想的内景について考察、透谷との内応、位相について試考してみたい。テキストは、桑原武夫・島田虔次訳・校注『中江兆民　三酔人経綸問答』（昭40・3第一刷、昭64・5第三十一刷　岩波書店）を用いた。以下、「岩波本」と記す。兆民の言、少しく晦渋、ために同書は「現代語訳」を収載している。しかし、本稿は兆民の文意と文体を重んじ、引例に当たり原文をあえて少し長く引くを試みた。ただ、これは兆民文の課題となるところでもある。

一．兆民「三酔人経綸問答」考

「三酔人経綸問答」には、近代化を図る日本に対する秀抜なる思想絵図の提示がある。それまで一度も会ったことのない洋学紳士、豪傑君、南海先生による一夜の鼎談とその記録、更には、記録の上部に記された二十一項の「眉批」（注2）及び瞬時現れる著者の「顔出し」から成り立っている。以下、三者の論理とその作品構図、その意味について追う。

（一）、三酔人の論理

まずは、洋学紳士、豪傑君、南海先生の提示した論要とその意味について辿る。

〈洋学紳士の提要〉

「民主家」洋学紳士は徹底した軍備の撤廃、戦争放棄の論を展開、その論拠として「進化」の理法を語る。

「欧州諸国は、既に自由、平等、友愛の三大理を覚知しながら、何故に民主の制に循はざる邦国、猶ほ多きに居る乎。何故に極て道徳の義に反し、極て経済の理に背きて、国財を蠹蝕（としょく）する数十百万の常備軍を蓄へ、浮虚の功名を競ふが為めに、無辜の民をして相共に屠斬せしむるや。」

「文明」を誇る国に対して、「我小邦」も「自由を以て軍隊」となし、「平等を以て堡塞」となし、「友愛を以て剣砲」となして対するを言う。それでも侵攻するに次のように対する。

「我れの兵備を撤するに乗じ、悍然として来寇する時は、吾儕尺寸の鉄を帯びず、一粒の弾を挟さまず、迎へて之を礼せば、彼れ果て何事を為す可き乎。剣を揮ふて風を斬らんに、剣如何に鋭利なるも、風の飄忽茫漠たるを奈何せん。我れ風と為らん哉。」

論は世界連邦、世界平和の提唱に到る。「敢て我邦に来り拠らん乎。土地は共有物なり。」、「我れ今日甲の国に居る、故に甲国人なり。我れ明日乙の国に居れば、又乙国人にならんのみ、大劫会の期未だ至らずして、我人類の故郷たる地球猶ほ生活する間は、世界万国、皆我宅地に非ずや。」、「彼れ無礼にして我れ有礼に、彼れ非理にして我れ理に合」する、それでも、「彼れ怒りて暴を肆まゝに」するなら、「我れ笑ふて仁を守らんには、彼れ果て我れを奈何せん。」と論ずる。凄まじい軍備撤去、戦争放棄、世界平和論の提唱である。

豪傑君は「君は狂せしに非ざる乎。」と反応する。対して、洋学紳士は、これらの論の根拠として以下、縷々と「進化の論」を呈す。いわく、「穴居して野処」するより「石を累ねて、居宅」を興し、また「人事的進化」を経て、「君主制から立憲制、民主制へと進」む「政事的進化」、「自由」、「平等」等「諸種の権利」を持つ社会に及ぶ。ただ、その「進化」はその時、場所に応じて表出すると言う。一例を引く。

「紛擾無紀の世より出でゝ、進化の理第一歩の境界に入りたるの一事は、阿非利加夷蛮の民を除非して、余は皆然らざる莫し。即ち亜細亜諸国の民は、一たび此境界に入りたる以来、淹留して未だ進むこと能はざる者なり。欧州諸国に至ては、早き者は第十七世紀より、遅き者も亦第十八世紀より、第一歩の境界を出でゝ、更に第二歩の境界に入れり、是れ即ち東西文明の度級の相異なる所以なり。」

社会進化、進化の理法に応ずるを信じ、その先に「軍備の撤廃」、世界平和が在ると言うのである。

更に驚くべきは、「正当防禦」の戦いの拒否である。もし「進撃」されるに、「彼れ我を殺さんと欲す、故に我も亦彼を殺す、と曰ふときは、是れ猶ほ、彼れ悪事を為さんと欲す、故に我も亦悪事を為す、と曰ふが如くなればなり。」として、「敵国来寇するに方り、我れ苟も我軍を列し、我銃を発して、自ら防せぐときは、既に是れ防禦中の進撃にして、悪事たるを免れざればなり。」として、次のように論を加える。

「僕の意に於て、我邦人が一兵を持せず一弾を帯びずして、敵寇の手に斃れんことを望むは、全国民を化して一種生きたる道徳と為して、後来社会の模範を垂れしむるが為めなり。彼れ悪事を為すが故に我も亦悪事を為すと曰ふが如きは、是れ即ち君の旨趣なり。何ぞ其れ鄙な

るや。」

かくて、洋学紳士は、その思想を、法や権利でなく、その極を「道徳」に置く。他国の侵略、他国の侵攻を圧えるに、心の存在、「道徳」を措定するのである。兆民の政事的思想的理想の一つの極となる提示である。

〈豪傑君の提唱〉

対して、豪傑君は、「侵伐」、「外征」を論じて、次のように、遅れて出発した我国「小邦」の志向を論ずる。

大きく四つのステップで自論を展開する。第一は、洋学紳士の戦争放棄を難じ、動物も人も、国家も「勝つことを好みて負くることを悪」んできた、「争は人の怒なり。戦は国の怒なり。争ふこと能はざる者は懦夫なり。戦ふこと能はざる者は弱国なり。」と戦うことを主張、「文明国は必ず強国なり。」、「昔の文明国は昔の善く戦ふ者なり。今の文明国は、今の善く戦ふ者なり。」と次記のように戦いを肯定する。

「戦争は、各国文明の力の験温器なり。二国将に戦はんとする乎、学術最も精なる者、貨財最も富める者、必ず勝を獲可し。其武備殷実なるが故なり。五州の中に就き欧羅巴、文明最も進めり。故に武備最も充てり、戦最も強し。是れ其明証に非ず乎。是れ事の実迹に非ず乎。」

結果として、西欧諸国の殖民地政策を讃す。

「地球上到る処、殖民地無きは莫し。且つ近日欧州諸強国の為す所を見ずや。魯、英、独、仏、互に目を瞋らし、交々腕を撫で、機を視て将に発せんとするの勢は、恰も爆発薬を堆積して地上に滾転するが如し。一時轟然として迸裂する時は、千百万の兵卒は欧州の野を蹂藉し、百千艘の闘艦は亜細亜の海を攪破せんとす。是時に於て区々として、自由平等の義を唱へ、四海兄弟の情を述ぶるが如きは、真に陸秀夫の論語（注3）なる哉。」

紳士君は戦争を「不好事」となすが、戦いを「楽」とするもあると言う。

次いで第二のステップ。我国のような「邦小なる者」はそれら西欧諸国に及ぶべくもないが、この「邦を大にし、邦を富し、兵を増し、艦を多くするの策有り」として次のような策を提示する。豪傑君「外征」の論である。少し詳記する。

「亜細亜に於て乎、阿非利加に於て乎、僕偶ま之を忘れたり。一大邦の在る有り、僕偶ま其名を忘れたり。是れ甚だ博大なり。甚だ富実なり、而て甚だ劣弱なり。僕聞く、此邦、兵百余万衆有りと雖も、然ども混擾して整はず、緩急用を為すに足らず、と。僕聞く、此邦制度有るも制度無きが如し、と。是れ極て肥腯なる一大牲牛なり。是れ天の衆小邦に餌して、其腹を肥さしむる所以なり。」

「其名を忘れたり。」と朧化して記す。そこへの侵攻と

その方法を具体的に言う。

「何ぞ速に往て其半ばを割ざるや、其三分の一を割ざるや。一紙の詔令を発し、尽く国中の丁壮を募る時は、之を少くするも四五十万衆を得可し。府庫の材を傾くる時は、之を少くするも数十百艦を買ふ可し。兵往き、商往き、農往き、工往き、学士往き、兵は戦ひ、商は販ひ、農は耕し、工は作り、学士は教へて、彼邦の半、若くは三分の一を割取りて我邦とするに於ては、我れ其れ大邦と為らん。材阜に、人衆く、乃ち敷くに政教を以てせば、城塁起す可く、煩礮鋳る可く、陸には百万の精鋭を出す可く、海には百千の堅艦を泛ぶ可し。我小邦一変して魯失亜となり、英吉利と成らん……旧小邦は如何か之を措置せん。我れ既に新大邦を得たり、旧小邦は何ぞ心を留むることを須ひんや。」

後の中国、満洲侵攻の先取りとも言える。驚くべき予見である。かくして、「材益々殷富」、「此を以て彼の欧米文明の效力を買取るに於ては、彼英、仏、魯、独の悍強なるも、復た何ぞ我を侮ることを得ん哉。」と論を進める。

第三のステップ。その方法、「外征」の策。「他邦に後れて文明の途に上る者」は、「一切従前の文物、品式、習尚、情意、を挙げて之を変更せざる可らず」と言う。その時、「必ず旧を恋ふの念と新を好むの念」との「恋旧」、「好新」の二者が発生して乱れる。「恋旧」は「齢三十以上」、「三十以下の人物」は「往々好新家」である。この「恋旧」の徒の多くは維新時、自由民権に動いた者で、新規の文物他を「軽浮の状、虚夸の態」ありとて憎み、「新を好むの徒」は「恋旧」を「旧規に属する事物」、「皆腐壊」して、「一種の臭気」ある如くとして排する。

驚くべきは、「好新元素は譬へば生肉なり。恋旧元素は譬へば癌腫なり。」と論定することで、「国の為め」には、この「癌腫」を除かねば、「生肉」を肥やすことはできない、その策として豪傑君は「征戦」を論ずる。旧自由民権の徒を癌腫として、その排除を言うのである。

「癌腫の割断場は、亦彼の僕が名を忘れたる阿非利加か亜細亜の一大邦に若くは莫し。故に僕は、二三十万衆の癌腫家と倶に彼邦に赴き、事成れば地を略して一方に雄拠し、別に一種の癌腫社会を打開せん。事成らざれば屍を原野に横へ、名を異域に留めん。事成るも事成らざるも、国の為めに癌腫を割去るの効果は必ず得可きなり。所謂一挙両得の策なり。」

侵攻進めば、「尽く国内の丁壮を挙げ彼大邦に赴き、小を変じて大と為し、弱を変じて強と為し、貧を変じて富と為し、然後、巨額の金を出して文明の效を買取り、一蹴して泰西諸国と雄を競ふことを求むること、是なり。」と論定する。

外征、侵伐、成功すればそれでよし、もし失敗しても、その時は「恋旧」の徒、それは多く維新時の自由民権にかかわった古き層、「癌腫」であり、それらが消えることになる、それはそれで多くの利を得ると言う。

かくて、第四、「小邦」の「征戦」をあらためて提示する。

「嗚呼、孛仏の兵は硝煙を欧州の郊に漲らし、英魯の軍は塵を亜細亜の大陸に揚げ、瀾を亜細亜の海洋に簸ぐるに方り」、それを防ぐに「万国公法」は恃むべからざる。欧州や亜細亜に乱あるに当り、「小邦」たる我国はただに「征戦」をと説く。

「小邦たる者は、何に由りて自ら防守することを得る乎。唯速に沈没に垂んたる小艇を去りて、隤然として動かざる大艦に移るの一策有るのみ。危殆なる小邦を棄てゝ、安穏なる大邦に赴くの一計有るのみ、且つや、清浅の流は、以て大魚を捕ふ可らず。治平の時は、以て奇計を出す可らず。欧亜二州一時に妖雲を醸出するの候、是れ尤も小邦たる者の、禍を変じて福と為し、弱を転じて強と為すの好機会にして、実に千歳の一時なり。」

欧州や亜細亜の乱れている時、勝っても負けても利有りとして、ただに外征、侵伐を説く。まさにこの道を以後の日本は進んだ。

〈南海先生の集約〉

南海先生、二者の論の集約と批評を行い、更に乞われて自論を提示する。今は二論の集約は略し、その批評と提言を摘要する。

まず、洋学紳士の進化論のもつ功罪についての批評。進化論の重用な特質は、その進化の内実にある。自由や平等、友愛など、その道程の進化は、優れてその未来に可能性がある。しかし、進化の方向について、もし、その方向が兵器や軍艦などに行われたらどうであろうか。進化はただに、自由、平等などの道と異なる時がある。その恐ろしさを言う。「政事家」の安易な進化の「言為」を恐れる。「進化神」の「悪む所」がある。しかし。

「政事家にして進化神の悪む所を知らずして施設する所有るときは、幾千万の人類、実に其禍を受けん。吁嗟、畏る可き哉。進化神の悪む所は何ぞや。時と地とを知らずして言為すること、即ち是れのみ……僕過てり。」たとえ、「幾千万人類が禍を蒙むるも、其迹に就て見るときは学士は必ず曰はん、是れ自ら然らざるを得ざるの理有りて然りし、と。」

南海先生はそれを恐れて次のように続ける。

「是に知る、凡そ古今既に行ふことを得たる事業は、皆進化神の好む所なることを。然ば即ち進化神の悪む所は何ぞや。其時と其地とに於て必ず行ふことを得可らざる所を行はんと欲すること、即ち是れのみ。」

次いで、豪傑君の「侵伐」論の限界について。強大国

家が弱小、後進の国家への侵攻は、もしそれが力の差のままに行われるなら、その論はよし、しかし、事は必ずしもそのままに行われない。侵攻を受けた国々は、ただに負け続けるのではなく、その抵抗は持続され、時に強い反抗を生じる。「我亜細亜諸邦の兵は、此を以て侵伐せんと欲するときは足らざるも、此を以て防守するときは余有りと為す。」、「何ぞ紳士君の計に従ひ、手を束ねて死を俟つことを須ひん哉、」と言う。

「抑々豪傑君の所謂阿非利加か亜細亜の一大邦は、僕固より何の邦を指すことを知ること能はず。但、所謂大邦若し果て亜細亜に在るときは、是れ宜く相共に結で兄弟国と為り、緩急相救ふて、以て各々自ら援ふ可きなり。妄に干戈を動し、軽く隣敵を挑し、無辜の民をして命を弾丸に殞さしむるが如きは、尤も計に非ざるなり。若夫れ支那国の如きは、其風俗習尚よりして言ふも、其文物品式よりして言ふも、其地勢よりして言ふも、亜細亜の小邦たる者は当に之と好を敦くし、交を固くし、務て怨を相嫁すること無きことを求む可きなり。」

安易な進化論や侵攻論への疑義、それらは、見事な後代への予兆と予言をなすところがある。ここで、「支那国」と具体的に述べている。

洋学紳士、豪傑君、最後に南海先生の「所見」を乞う。

「南海先生乃ち曰く、亦唯立憲の制を設け、上は皇上の尊栄を張り、下は万民の福祉を増し、上下両議院を置き、上院議士は貴族を以て之に充てゝ世々相承けしめ、下院議士は選挙法を用ひて之を取る、是のみ。若夫れ詳細の規条は、欧米諸国現行の憲法に就て、其採る可きを取らんのみ。是は則ち一時談論の遽に言ひ尽す所に非ざるなり。外交の旨趣に至りては、務て好和を主とし、国体を毀損するに至らざるよりは、決て威を張り武を宣ぶることを為すこと無く、言論、出版、諸種の規条は、漸次に之を寛にし、教育の務、工商の業は、漸次に之を張る、等なり。」

結局は、立憲制のもと、実に平明な論、しかし、そこに帰るしかない。だが、明治二十年、これとて、見事な予見である。三者ともに笑いながら論を続ける、「更に、宴語すること霎時にして、隣鶏忽ち暁を報ぜり。二客驚ひて曰く、請ふ、辞せん。」とする。かくて、この作品は次の一節にて終わる。

「南海先生笑ふて曰く、公等未だ省せざる乎。公等の辱臨せらるゝより、雞声暁を報ずること既に両回なり。公等帰りて家に至れば、已に両三年を経過したるを見ん。此れ自ら、余が家の暦法なり。二客も亦噱然として大笑し、遂に辞して去れり。後十許日にして、経綸問答の書成れり。

二客竟に復た来らず。或は云ふ、洋学紳士は去りて北

米に遊び、豪傑の客は上海に遊べり、と。而て南海先生は、依然として唯、酒を飲むのみ。」

（二）内構造―「眉批」と時空間―

三酔人鼎談の構図は右記のようであるが、前記のように、今二つの作品内構図が措定されてもいる。一つは「眉批」、今一つは「両三年」他の時間構造である。少し辿る。

〈「眉批」について〉

前記のように、この作品は二十一の「眉批」が配されている。前記の「岩波本」では、これらを前掲して「三酔人経綸問答目次」としている。これにより作品全景は一望できる。しかし、これらはただに目次の役割だけではなく、作品の内景解説、ときに総括的な作品介入をなしているところがある。「眉批」も今一人の登場人物、あるいは作品展開の整序的な役割を持つ。例えば、「民主家と侵伐家と南海先生を訪ふ」（「眉批」二）、「法律の大議論」（「眉批」十）、「旧自由党と改進党との顔触れ」（「眉批」十四）などなど。

しかし、作品の結末部に二つの奇妙な「顔出し」がある。一つは「此一段の文章は少く自慢なり」（「眉批」十九）、今一つは「南海先生胡麻化せり」（「眉批」二十一）である。少し考を加えたい。

前者は、作の終末部に近い部分の「眉批」である。気がかりは、この「文章は少く自慢なり」の一節である。ここでの「文章」は、文体をいうのでなく、内容をさすのであろうが、気になるのは「自慢なり」と言う一節の主体、誰が「自慢」しているのかということである。ここには作品の内実展開の誘導や開示ではなく、内容に対する意識の提示がある。著者の意向の提示である。著者中江兆民の顔出しとみるか、作品内部の自注であるか。自注するのは誰か。

更により奇妙に思われるのは、後者『「眉批」二十一』、「岩波本」流に言えば、この作の最後の目次である。しかしそれは作品展開の誘導ではなく内質批評の形を持つ。この個所は、洋学紳士、豪傑君の論を評し、南海先生の最終総括、自論の提示の個所である。その提示を「南海先生胡麻化せり」と括る。これは誰の語か、解説かそれとも、主想か。何を「胡麻化」したと言うのか。それを言うのは誰の思いか。南海先生も兆民の一分身と考えるなら、それを「胡麻化せり」と言うそこに著者中江兆民の意向があるのか。

少し語を加えるなら、「三酔人経綸問答」の洋学紳士、豪傑君、南海先生とは誰か。その後背に、土佐自由民権の地より出て、フランスに学んだ筆者中江兆民がいる。民主家、自由、平等、世界の平和を志向する洋学紳士、後れて出発して「小邦」日本、欧州諸国との並行を志す豪傑君、二者の間にあって、最も平明な現実政事論を提

要する南海先生、それぞれの背後に兆民がいる思いがする。前二者への批評、現段階における集約たる南海先生の提要、そこに、わけてより多く、兆民の分身の存在を見る。これらは当代におけるぎりぎりの集約、兆民の政事提要に思われる。しかし、それを「南海先生胡麻化せり」と評する、それなら、「胡麻化」さない道はどこにあるのか、あったのか。筆者の顔出し、その内底にある兆民の志向とは何か。それはあるのか。「酒を飲むのみ」とは。

〈「両三年」他の時間構造について〉

作品構造上、私は今一つ読み切れない、その意図の所在疑義を感ずる個所がある。それらについても寸考してみたい。

すなわち、作品の末尾の、次のような時間配置である。三人共に飲み、共に語り「暁」を迎え、「二客驚ひて」、「辞」を提す。前記のように、「公等の辱臨せらるゝより、雞声暁を報ずること既に両回」、「公等帰りて家に至れば、已に両三年」を経過したるを見る、更には辞して去るのち、「後十許日にして、経綸問答の書」なれりと記されている。暁を報ずる「既に両回」とは何か。二夜なのか、それとも雞声二回なのか。「辱臨」して「両回」というが、これを「二夜」とすると、その設定は不明。

加えて、「両三年」の経過とは何か。何故「両三年」なのか。人生の栄枯を黍の一炊に見る「邯鄲の夢」（「枕中記」）や、二十年の栄華を古い槐樹の下の大蟻の世界に見る「南柯の夢」（「李公伝　南柯太守伝」）などに擬すのか。しかし、ここでは夢の時間の推移ではなく、現実の時間の経過を言う。さて、「両三年」の現実に何があったのか。奇妙な設定である。

以下、「後十許日」にして「経綸問答の書」なれり、更に三者の後事を記して、或は言う、「洋学紳士は去りて北米に遊び」、「豪傑の客は上海に遊」び、「南海先生は、依然として唯、酒を飲むのみ。」とは何か。少し私なりに集約をするなら、これらは、夢物語の拡がり、未来への予断ともとれる。しかし、その内実は、現実の世界の空夢、彷徨い、時に悲傷、そして諦視、諦観があるともとれる。

（三）内景―予言と予兆の世界―

この作品には、将来に対する三つの予兆、予言のようなものが内包されていて、それらは作品の内景、作品の主想ともなっている気配がする。少しく私的断想なるところもあるが、最後にその内構造について触れる。

一つは洋学紳士の戦争放棄について。前記のように、紳士は君主ー立憲ー民主の三つの制度の変容と展開を想定、その原拠に進化論、進化の道程を措定した。すなわち、紳士は、人類の社会的進化、発展を想定、それらの

展開の上に、軍備の撤廃、戦争放棄、世界平和を提唱したのである。しかし、南海先生の批評のように進化は必ずしも予測どおりには展開しない。進化の道行は、各国各様に表れる。時に更なる軍拡、更なる侵攻へと進むもでてくる。

現実に、平和への志望や世界国家への志向は、大戦災禍の後に国際連盟や国際連合へ進み、世界平和への道を想定した。しかし、その平和への志向は、いずれも漸次、崩壊していく。

そして、それらの道行の中、突出した反応があった。第二次世界大戦、太平洋戦争（大東亜戦争）の後、日本は「戦争の放棄」という、壮大なる夢を策定した。「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」（「日本国憲法」　第2章　第9条）、「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」（同　「第9条　2」）。戦後の日本の最大のテーゼであったかもしれない。まさしく洋学紳士の提要に重なる。しかし、ゆっくりと壊れていく気配がある。

今一つ、兆民の、より大きな凄まじい進化の内質への配考がある。南海先生は、「進化」の恐ろしさや「悪む所」を見事に予見している。前記のように、「知らずして施設」するとき、「幾千万の人類、実に其禍を受けん。」と言い、更に「その禍を蒙」っても、「学士は必ず曰はん、是れ自ら然らざるを得ざるの理有りて然りし、と。」と言を強めていた。人類科学の進化は、ただに平和への道でなく、時により恐るべき進化に進む。近代科学は核の開発に進み、その成果の行施へと進んだ、幾千万の災禍、「学士」「自ら然らざるを得ざるの理」と言う。核の災禍、アインシュタイン、オッペンハイマー等の反応。南海先生は、見事に予見している。時に明治二十年、その背後にいる中江兆民の識と見の凄さを感じる。

予見の三つ。豪傑君の主張した後進国への侵攻、侵伐の道。これも侵攻された諸国、ただにそれに従わず、「抵抗の力」を持ってくるを言う。この予言も見事に当たっている。先進諸国の、東南アジア、アフリカ、インド、中国への侵攻とそしてそれらの反抗。日中戦争、ベトナム戦争、中東戦争、近くはロシアのウクライナ侵攻などなど。弱小国が必ずしも弱小国に終わらない。南海先生の豪傑君に対する批評は、また、世界構造の変遷への鮮やかな予言、予兆を提していた。

南海先生は洋学紳士、豪傑君の世界想定をこのように開示、予告しながら結局は、前記のように立憲制度下の政治、社会構図を提示するに終わる。「眉批」は「胡麻

化せり」と嘆じ、紳士は北米へ、豪傑は上海へ、南海先生は「酒を飲む」ことで、作品は終熄する。

少し、断想を集約するなら、私はここに兆民の悲傷、悲哀を見る。秀抜な世界地図、世界構想の提要と、その途絶への予告。様々なる分身擬装を試みながらその終熄に正鵠な予測の世界図は描けない。その背後にいる中江兆民の悲哀、悲傷そして、諦視がこの作品にそっと封入されている気配がする。

二、透谷と兆民そして徳富蘇峰

透谷「漫罵」の射程に視を返しつつ、少し当代の様相について徳富蘇峰の反応もあわせて辿る。

(1)、「漫罵」の射程

前記「兆民居士安くにかある」発表に先立って透谷に明治二十五年五月「トルストイ伯」なる評論がある。六つの小節よりなるトルストイ言及で、その第四節「戦争に対する伯の意見」に「伯の著書『コサック』を読み、『イバン・ゼ・フール』を読みたらん人は必らず、伯が戦争に対する悪感情を認むるなるべし。」として次のように記している。

『『イバン』の中に其主人公なるイバンの口を仮りて言はしむるところを見るに、イバンは兵卒を以て無用なるものと認め、敵ありて来り犯すに及びては満面の愛笑と懇情とを以て出でゝ彼を迎へ、遂に彼をして帰服せしめたる有様を叙するが如き、伯が平和主義の本領を推知するに余りあり。其他の諸著を読みても、伯の精神は人間の霊魂を改造するを以て、大主眼となすにある事を知べし。」

「イバン・ゼ・フール」の戦争放棄、平和論、それはまさしく洋学紳士の平和提唱と類同する。

そして、本稿の「はじめに」に引いたように、明治二十六年九月「兆民居士安くにかある」における兆民の動向に対する透谷の言及があった。透谷は政治や思想活動から実業界の活動に赴く兆民に「兆民居士、世を捨てたるか、」と嘆じた。

続けて以下のように嘲じている。「吾人居士を識らず、然れども竊かに居士の高風を遠羨せしことあるものなり、而して今や居士在らず、徒らに半仙半商の中江篤介、怯懦にして世を避けたる、驕慢にして世を擲げたる中江篤介あるを聞くのみ。バイロンの所謂暴夜なるルーソー、理想美の夢想家遂に我邦に縁なくして、英国想の代表者、健全なる共和思想の先達なる民友子をして仏学者安くにあると嘲らしむ、時勢の変遷豈に鑑みざるべけんや。」

後に記すように、この一文は、民友子徳富蘇峰の「仏学者何処にかある」(明26・8)を受けてのものでもあった。

兆民の途絶を透谷はどのように見たのか。この一月後、透谷は「漫罵」で世を嘲じ、「一夕観」（明26・11）で世を諦視し、明治二十七年五月、自死を遂げる。

（2）、兆民・蘇峰・透谷

この透谷の兆民言及の前と後、まさしく兆民の多動がある。あわせて蘇峰の動向もそれらに重なる。紙幅を越えたが、最後に、これらを垣間見る。

この間における兆民の動きはきわめて多彩、少し省筆しながらその動向を辿るなら、これはまた、まさしく、洋学紳士、豪傑君、南海先生の動向に重なるところがある。兆民、三酔人の世界の内界放浪者としてある。

明治二十年五月、「三酔人経綸問答」上梓。同年十二月、保安条例公布、兆民、二年間の皇居外三里の地への退去を命じられ、大阪に。二十一年、大阪『東雲新聞』主筆。二十二年二月、大日本帝国憲法発布、東京へ帰る。再興自由党に参加。二十三年七月、第一回総選挙、大阪府第四区から出馬、衆議院議員に。十一月、第一回帝国議会開会。二十四年二月自由党、政府と妥協、兆民、議員辞職。七月、北海道へ、小樽『北門新報』主筆等。二十五～三十年、実業界へ。紙商、山林業、毛武鉄道他の鉄道事業、中央清潔株式会社等々、いずれも失敗。明治三十年、国民党結党に参画。三十一年、娼楼設置、吾妻鉄道設立等に。三十三年、近衛篤麿の国民同盟会参加、国民主義運動へ。明治三十四年三月、癌の診断。九月、『一年有半』出版。続けて、『続一年有半』擱筆。十二月十三日、死去。

その後半生は、擬洋学紳士、擬豪傑君、そして擬南海先生への転生がある。ここでも「三酔人経綸問答」はまさしく、兆民の半生の予言、予兆でもあった気配がする。洋学紳士民主への志、わけて気がかりは、自由民権運動の後生を「癌」とした豪傑君、しかし兆民はその後、自由党にもかかわる、それらいずれも批判しながら、平明な専制制度の案を提じて「酒」に活きる南海先生、それらは兆民の後半生に多く重なる。

そしてまた、この兆民の動向の中間に、民友子蘇峰の参入があった。前記蘇峰の兆民言及は明治二十六年八月三日、『国民之友』百九十八号の「時事寸評」の記事「紙屋材木屋の兆民居士」による。札幌において紙屋、材木屋を営んでいるという、この「政界一奇骨の近状」を受けて、同八月十三日『国民之友』百九十九号に「仏学者何処にかある」を記したのである。蘇峰は次のように言う。

「苟も維新以来、我国大変革の歴史を通観するものは、仏蘭西文物の我国に影響するの、大且つ深きを識認せざらんと欲するも得ざるべし。」、我国は軍事、文物いずれもそれにより「面目を一新した」、「政府の事業漸やく法

律の整備に趣くや、此思想は著しく、実際の効果を結び き。人権平等、人類自由の思想なかりせば、如何ぞ士族華族の特権を廃滅し得ん耶。如何ぞ、万民をして、法律の前に平等ならしむるを得ん耶。」と言う。その思想は、日本にも世界にも多くの影響を与えた。しかし、今、多く「地下に葬られ」、それらの反動の動きもあることを憂える。

「反動党の気燄、天下に充ち、自由を口にして保守の実を行ひ、進歩を名として一の理想なきものあり、人権説は悪魔の如くに罵らるゝの時、汝仏蘭西学者は何くにある乎。聯邦を合して統一的国家を作らんが為めに唱へらるゝ独逸の政略的国家主義が、已に統一合同せる我国民に向つて凶威を逞ふせんとし、人権の平等、人類の自由に不服すらあらざる分子が、歴史を護り、国民的偏癖心に訴へて、相率へて国家主義なる大傘の下に趣きて、以て進歩光明を掩はんとする時、汝仏蘭西学者は何くにかある。」

反動化して国家主義にも趣かんとする今、「仏蘭西学者若し猶ほ其生命あらば、何ぞ今に及んで光明ある人権自由の大旗を掲げて、政治文学の場に現れざる。人権自由の思想は未だ全く我国に死せざる也。」

仏思想壊退に対する悲鳴に近い叫びである。蘇峰は明治中期、洋学紳士的な社会への先導の位置にあり、明治二十六年代、まさしくその強い主張の立場にあった。前記透谷「兆民居士安くにかある」は、その先導の下にあった。しかし、明治二十七～八年の日清戦争、二十八年下関条約、その後の三国干渉を経て、蘇峰は国家主義、皇室中心主義へと大きく変容していく(注4)。蘇峰、洋学紳士から豪傑君への大なる変動とも言える。しかし、その時には、透谷も兆民もすでに死していた。

おわりに

透谷の自死、兆民の病死の二つの死、あわせて、蘇峰の変容とその後の活動、それらは、日本近代化の動向における一つの大きな分岐点であったことを示唆するものでもある。

見てきたように、「三酔人経綸問答」においては、その三者の鼎談を「両三年」の経過の中としている。「両三年」とは、兆民の、三人の分身の、その後の道程に対する先行ともとれないか。もしくは、三者の「両三年」の個々の彷徨とは、三者の思想の確立への道程の時間ともとれる。両三年の思考と思考の確立。少しく考を添えるなら、三者は兆民の三分身の志向確立とその提要の期間ともとれる。その各個に兆民の内的真実が託くされている。その道程が「両三年」であり、その成果の最終回答は、結局、「南海先生胡麻化せり」に終熄する。

かくて、「三酔人経綸問答」は、兆民の「漫罵」であり、

一つの悲傷、諦視への予言的提要ではなかったか。

私は透谷の嘲罵「漫罵」を表象例とし、その思想的射程として日本近代化の道程について追尾している。そして、「漫罵」の遡行的射程として、兆民の「三酔人経綸問答」を配した。南海先生「胡麻化せり」は、透谷の「革命にあらず、移動なり。」に呼応するところある。これらをただなる「嘲罵」と見るか、更なる近代化志向への一道程ととるか。

以上、「漫罵」射程の一つの遡行考である。

【注】

（1）「北村透谷『漫罵』の射程ー表層としての近代・反近代・超近代ー」（令5・5『北村透谷研究』第34号）「北村透谷『漫罵』の射程ー内層としての五つの近代化（上）ー」（令6・5『北村透谷研究』第35号）

（2）「眉批」は、本文の欄外に記入された評言のこと。（「岩波本」注による。）

（3）「論語」正しくは「大学」。陸秀夫は南宋の宰相、元との最後の戦いの時、幼君に「大学」を講じた。現実離れの理想主義を言う。（「岩波本」注による。）

（4）拙稿「徳富蘇峰と北村透谷―変容と夭逝の道程―」（令5・12『近代文学試論』第61号）参照。

―まきばやし・こうじ　広島大学・尾道市立大学名誉教授―